

## 「台風 19 号による被災」

2019 年 10 月 17 日

台風 19 号は、3、4 日前から、過去最大級の台風と言われ、警戒を呼び掛けていたが、中部地方から東北地方までの広範囲に渡り、大きな災害をもたらした。死者、行方不明者が 80 人を超すとのことである。19 号台風は、風の被害より水の被害が大きかったようだ。河川が氾濫、堤防が決壊し、多くの町々が冠水し、土砂崩れが起こった。泥水に浸かった家屋の復旧は並大抵ではない。農地も水に浸かり、農作物はもとより、農地のダメージも大きいだろう。歴史の教科書で、洪水による土砂の堆積によって、肥沃な土地ができ、そこに文明が栄えたと習った。今回は、そんな流暢なことは言っておられない。

私の団地は 4 時間ほどの停電になった。電気が切れたため、風呂水を加温することができなくなった。私はまだ暖かい内に風呂に入れたが、妻が入った時はぬるくなり、胃を冷やしたのではないかと、夜中、吐き気が続き、体調を壊した。わが家の被害であった。

私が育った村で、川が氾濫し、庭先まで水が来たことがあった。川が蛇行しているの、危険であると、川幅を広げ、海まで真っ直ぐに流れるように河川改修工事をした。お陰で、私の家は改修区域となり、立ち退かざるを得ず、家を失った。以来、洪水に見舞われた話は聞いていない。

19 号台風で、日本は災害に弱いことを改めて示された。電気、水道、道路などのライフラインがもろく、崩れてしまった。河川の決壊による水害に弱いことが分かった。治水整備を確かにする、山林を補強する、街造りを低地にしないことなどが考えられる。日本人の多くは一戸建ての家を望んでいる。フランスの哲学者が来日し、電車で旅した時、どこを走っても家屋があるのに驚いたと書いているのを読んだことがある。ヨーロッパは街をコンパクトにまとめ、集合住宅に住み、周りは、農地として活用している。将来を見据え、高台に頑強な集合住宅を造って住み、周りに農地を広げることにしたら、どうか。日本人は多様性を嫌い、画一化を好むけれども、家屋、街造りに関してはバラバラで、統一性がない。災害に強い、一貫した思想を持った街造りを考える時ではないか。

今回、何より考えさせられたことは台風の大規模化である。温暖化により、太平洋の海水温度が上がり、台風が大規模化したことは間違いない。人間は快適さと利便性を求め、エネルギーを大幅に費やした。お陰で、地球の温度は上昇した。体温でも 2 度上がると、体に大きな痛手を負う。地球を生命体として見れば、2 度上がったら、とてつもない変化が起こるだろう。既に、世界の至る所で、干ばつ、洪水などが起こっている。黙視できない状況ではないか。

折しも、スウェーデンの 16 歳のグレタ・トゥーンベリさんが国連本部で開かれた「気候行動サミット」で、温暖化に対し、「私たちはあなたたちを注意深く見ている。それが、私のメッセージだ」と語り始め、涙ながらに下記のように訴えている。「人々は苦しみ、死にかけ、生態系全体が崩壊しかけている。私たちは絶滅に差し掛かっているのに、あなたたちが話すのは金のことと、永遠の経済成長というおとぎ話だけ、何ということだ。」台風 19 号は彼女のメッセージを身近に、覚えさせられた。

福島原発事故が起こった時、日本は変わっていくと思った。しかし、走り始めたら止まらない国で、何も変わらず、利権に群がる人々の思惑通り、原発再稼働は進められている。台風の大規模化が進行し、被害は誰にでも及ぶ状況になった。小手先の対応ではなく、抜本的な変革が求められる。可能であろうか。台風 19 号の被災が、温暖化を抑え、自然災害から守るために何をなすべきかを、真剣に考える契機になることを期待する。